1版

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４年　６月　２日現在

機関番号：１３３０１

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：１８Ｋ００９９２

研究課題名（和文）3～4世紀中国湖南地域における社会構成の研究

研究課題名（英文）A Research on the Social Composition of the Hunan Region of China in the 3-4th Century

研究代表者

安部　聡一郎（ABE, Soichiro）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：１０３４５６４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国・三国時代（西暦3世紀）を代表する出土資料である長沙走馬楼三国呉簡を用い、その史料研究と出土地長沙周辺の歴史的・地理的環境の検討を踏まえ、当該期長沙の社会構成を簡牘・文献の両面から解明するものである。五代十国期（西暦10世紀）以降の地方志史料等を傍証として活用し、走馬楼呉簡中に出現する臨湘県内の郷の位置関係、さらに臨湘県外の重要地点と臨湘県の繫がりを、丘・里および労役負担者との関連から確定・把握する成果を得て、韓国での国際シンポジウム・中国の学術誌で公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
走馬楼呉簡は、三国時代の中国南方地域の地方支配と文字文化を把握する上で一級の史料であるが、そこに現れる地名等の所在が明らかでなく、文献史料等から知られる長沙周辺地域の歴史との関係が十分把握されていなかった。本研究の成果はこの点を前進させるものであり、簡牘研究によって文献に基づく従来の歴史理解を深化させ、今後の魏晋期簡牘研究、ならびに古代東アジア書記文化形成と国家形成の研究の上で援用可能な分析手法を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate the social composition of Changsha during the Three Kingdoms period (3rd century A.D.), using the Changsha Zoumalou Sanguo Wujian, from both a slips and documents perspective, based on a study of the historical and geographical environment around Changsha. By utilizing local historical documents from the 10th century AD onward as supporting evidence, we were able to determine the location of the townships within Linxiang that appear in the Zoumalou Wujian, as well as the connections between important points outside of Linxiang County and Linxiang County, in relation to Qiu, Li, and the people who were responsible for statute labor. The results were published in an international symposium in Korea and in a Chinese journal.

研究分野：中国史

キーワード：三国時代　出土資料　走馬楼呉簡　長沙

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

長沙走馬楼三国呉簡（以下、走馬楼呉簡）は、初の本格的な後漢末・三国時代（A.D.3c）の出土竹簡・木簡（以下、簡牘と総称）として、その後長沙市内・湖南省内で相継いで出土した後漢・三国西晋簡牘などと共に、当時同地域を管轄していた地方行政単位（郡・県）レベルの地方行政・社会の実態を明らかにする史料として注目されている。
本来的に考古資料である簡牘は、一次史料として高い価値を持つ一方、ある限定された時間・空間に関する史料に過ぎないという限界も持つ。そのため、走馬楼呉簡も発見当初から多大な注目を集めながら、形式の分類や書式の解明に労力を奪われ、結果として従来蓄積されてきた後漢・魏晋南北朝史研究から孤立するか、簡牘の限られた字句に依拠し強引に従来の歴史研究の成果と関連づける次元から抜け出せない傾向があった。しかしこれまでの出土文字資料研究の系譜を踏まえれば、走馬楼呉簡を中心とする後漢末・魏晋時代簡牘（A.D.2c-3c、以下魏晋期簡牘と総称）の研究も、形態観察に基づく作成・使用方法の分析を基礎に、簡牘出土状況や周辺の歴史的・地理的環境との考量によって当時の政治・社会的文脈の中に位置づけることでこそ深化し得るのであり、そうしてこそ、上述の時間・空間の限界を超える性格を獲得し、文献に基づく従来の歴史理解、さらに東アジア書記文化の理解の深化に資することが可能となると考えられる。

２．研究の目的

本研究では、長沙地域の社会階層分布と土地利用状況を把握することで、豪族層を中心とする当該時期長沙社会の構成の実態を具体的に解明することを目的とした。これは、上記 1.に述べた背景を踏まえ、簡牘研究の系譜を踏まえた方法が魏晋期簡牘研究の深化にも有効であるか、また魏晋期簡牘研究から従来優れた成果を蓄積してきた当該期政治・社会の研究を深化させる手法を提供し得るか、以上二点を探求するためである。

３．研究の方法

主要史料とする走馬楼呉簡は、後漢・三国時代に当該地域を管轄していた臨湘県に関連する行政文書・帳簿群であり、臨湘県管轄下の郷や、郷の下位にある居住・耕作・徴税の小単位＝丘、丘とは別に秦漢時代より存在する人・家族把握の小単位＝里、それに属する納税者、県・郷の担当官吏が多数出現する。代表者はこれまで、『長沙走馬楼三国呉簡　竹簡』にて公刊済の竹簡史料を用い、形態観察と簡牘出土状況の検討の成果を併せ、主として賦税納入簡に現れる郷－丘の統属関係や関連する納税者姓名・担当官吏名の全面的なデータ整理を行い、郷－丘の統属関係に関する成果を挙げてきた。本研究はこの成果を基礎に、以下の各段階を分けて実施する計画であった。
ア)走馬楼呉簡について、今後の史料公刊に併せ既存データを継続して整備し、郷－丘統属関係と納税者の郷・丘所属および収税担当官吏の間の相関関係を解析して、これと戸籍関連史料などから窺える納税者の身分・年齢ならびに世帯(戸)に付された等級(戸等)の情報を突き合わせることで、郷－丘における人・戸の分布状況および官による把握の状況を明らかにする。
イ)後漢・三国時代の臨湘県の状況を把握するため、公刊済みの長沙周辺の漢・魏晋墓の出土報告を集成し、その分布状況と墓葬形態・副葬品等の出土状況を整理する。これを臨湘県周辺の地理的状況、および後代の地方志にみえる地理状況と対照させることで、当該時代長沙地域の社会階層分布と土地利用状況を具体的に把握する。
ウ)以上の成果を複合することで、走馬楼呉簡から窺える郷－丘における人々の分布と各戸の状況を、漢・魏晋墓から窺える当該時代長沙地域の社会階層分布と土地利用状況の中に位置づける。以上のプロセスを経ることで、簡牘そのものの検討から得られるア）の研究成果を、当該時代の長沙社会、特に豪族層を中心とする社会構成との具体的連関性の中で理解できるようにする。

４．研究成果

本研究では、上述 3.の各段階において、走馬楼呉簡の収蔵機関である長沙簡牘博物館での簡牘の実見調査と、長沙周辺出土墓葬の位置や埋葬状況に関する情報収集を予定していた。しかしながら新型コロナウイルス流行の影響により、2020 年春以降現地に渡航しての調査・情報収集が実行できなくなり、計画を一年延長したが結果的に最後まで渡航が可能な状況に回復しなかった。そのため、特に墓葬に関する研究は現地博物館での情報収集が関鍵になっていたことから、本来目的とした豪族層を中心とする当該時期長沙社会の構成の実態を具体的に解明するところまで発展させることが困難な状況に陥ってしまった。従って最終的に本研究の成果は、郷－丘、さらに里における人・戸の分布状況および官による把握に重点を置き、これと臨湘県周辺の地理的状況、および後代の地方志にみえる地理状況と対照させることで、当該時代長沙地域およびそ

の外側に広がる湖南地域の地域構造の検討を推進した部分に限られることとなった。

(1) 臨湘県周辺の状況の把握

本研究の第一段階の成果となったのがこの方面であり、主要な成果は第二年度に公刊した単著論文「臨湘県の地理的環境と走馬楼呉簡」(伊藤敏雄・関尾史郎編『後漢・魏晋簡牘の世界』所収、pp.5-26、汲古書院、2020 年）およびその中国語版「臨湘県的地理環境与走馬楼呉簡」(『河北師範大学学報（哲学社会科学版)』43-2、pp.34-43、2020 年）である。先に課題として述べたうちの、走馬楼呉簡中にみえる郷―丘関係の把握、および当該時代長沙の土地利用状況の把握の上で基礎となる郷の位置関係について、特に河川と交通路の関係に新たに着目した。この検討のために、まず 1980 年代以降の考古学的成果・歴史地理学的成果と 2010 年代の新たな考古発掘成果を踏まえ、魏晋南北朝期長沙周辺の地理を伝える唯一の史料である『水経注』巻三十八湘水・臨湘県条等から復元した長沙周辺の地理を基礎として、魏晋南北朝期長沙周辺の地理的環境を整理した。その上で五代十国期（西暦 10 世紀）文献史料および清代(西暦 17～20 世紀)の地方志史料を活用することで、長沙地域の河川と交通路の関係を整理し、長沙周辺に現れる地名・施設名が長沙地域の交通や防衛の上で果たした役割を把握した。これを土台として、走馬楼呉簡中に出現する地名「劉口」および「漻口」が後世の「瀏口」「瀏陽口」、則ち瀏陽江河口であり、ここが長沙から湘江東岸を北に向かう街道の通過する渡し場であると同時に水上交通の要地であって、長沙防衛のうえで水陸両面の重要拠点となる場所であったことを論証した。この「劉口」については、走馬楼呉簡中の名籍（吏民簿）竹簡に「劉口」の渡し場（「渡」）に勤務する卒を出した記録が見えるが、字釈に問題があった。本研究では以前の実見調査の成果と簡牘出土状況を示す示意図を手がかりに「劉」字の釈字を確定し、かつ「劉」字と「漻」字が通用しており同一地点を指すと考え得ることを指摘し、併せてこれら卒が小武陵郷に属する高遷里に籍を持っていることから、小武陵郷が湘江東岸かつ長沙城（臨湘県所在地）の北側、瀏陽江河口を含む地域だったことを明らかにした。走馬楼呉簡中に出現する臨湘県内の郷の位置関係については、従来郷―丘の統属関係から相対的な位置関係が推測されていたが、今回の成果は部分的ながら、走馬楼呉簡および考古学・歴史地理学の成果を踏まえて具体的に郷の位置比定を成し遂げたものであり、当該時代長沙の社会を把握する上で基礎となる郷の位置関係の解明を前進させるものであった。

(2) 臨湘県外湖南地域の重要地点と臨湘県の関係、および丘の分布

(1)において成果を生んだ河川と交通路および郷の関係について、この視点を湖南地域に拡大し、それらが接続する先としての臨湘県外の重要地点を丘の分布と関わらせて把握し、そこから窺える当該期長沙社会の位置づけを検討したのが、第 3 年度に行った国際シンポジウムでの報告「中国・三国呉での丘の分布―長沙出土簡牘から みた三国呉の地方行政制度」(慶北大学校人文学術院 HK+事業団 第 1 回国際学術大会 古代東アジア文字資料研究の現在と未来(国際学会)、2020 年）およびこれを元に第 4 年度にまとめた中国語単著論文「三国呉荊州地区丘的分布及其性格」(『中国中古史研究』第九巻、pp. 273-282、2022 年待刊）であり、これが本研究の第二段階にあたる。

従来、郷―丘の統属関係から郷の相対的な位置関係が議論されていたことは上述したが、この議論は複数郷に関係する丘が余りに多く検出できることから行き詰まりを見せていた。近年では里と丘に特定の対応関係があるという指摘に依拠して、丘を後漢代の長沙地域の人口増加を背景に邑外の丘陵地帯に出現した自然集落ととらえ、複数郷に関係する丘の出現は人を把握する郷―里の系統と実際の居住地としての丘の間の矛盾として、里と丘の対応関係をもとに理解される傾向がある。この傾向は、臨湘県が丘陵地帯を抱えているという固有の地形的特徴と関連づけて丘という名称を考えている点に注意が必要であり、ここでは河川・交通路の視点から、走馬楼呉簡にみえる臨湘県外の丘の事例を整理し、その分布と臨湘県との繋がりを検討した。

結果として、写真版の詳細な検討に基づく字釈の再検討によって、臨湘県が属する長沙郡だけでなく、その西北、洞庭湖西岸に位置する南郡作唐県にも丘が存在すること、またこれら臨湘県外の丘が、直接的・間接的の差はあれ、すべて当時湘江西岸で呉によって進められていた武陵蛮夷平定などの軍事活動と、それを支える物資集積拠点に関わる形で登場しており、物資輸送や拠点への派遣などでそれに関わる官吏と家族・関係者などの所在を示す形で具体的な丘名に言及される例が主であることを明らかにした。地理状況の検討によれば、南郡作唐県は水路の多く流れる平原部にあり、丘陵地帯と平原部の境界に位置する臨湘県とは異質である。このことは、丘という名称が既に地形とは無関係に行政単位名として成立しており、臨湘県地域の特殊性と結びつけて理解すべきではないことを明示している。また同時に、臨湘県外の丘の情報が督軍糧都尉関係簡など特定の文書・帳簿類からのみ得られることも本検討を通して明らかとなり、臨湘県外の丘と軍事活動、およびそれに関与する官吏らの関係は、史料源となる文書・帳簿類の元来の目的に強く影響されて現出していることも示唆された。これは湖南地域での広がりの観点から丘の性格と歴史性を確認する成果であり、かつ走馬楼呉簡から得られる河川・交通路と官吏と家族・関係者らの情報の取り扱い方の手掛かりを与えるものである。運輸に関わる官吏らが元々それを生業としていた可能性

は以前から指摘されており、今回の湖南地域の地理的状況との比較検討からもそのことは示唆されるのであるが、それと豪族層との関連については、墓葬分布との対照だけでなく、このような史料自体の偏りも含めて今後検討していくべきと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 安部聡一郎	４．巻 9
２．論文標題 三国呉荊州地区丘的分布及其性格	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中国中古史研究	６．最初と最後の頁 273-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 安部聡一郎	４．巻 43-2
２．論文標題 臨湘県的地理環境与走馬楼呉簡	５．発行年 2020年
３．雑誌名 河北師範大学学報（哲学社会科学版）	６．最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.13763/j.cnki.jhebnu.psse.2020.02.004	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安部聡一郎	４．巻 70-3
２．論文標題 魏晋簡牘研究の現在－走馬楼呉簡を中心に－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 50-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 安部聡一郎
２．発表標題 中国・三国呉での丘の分布－長沙出土簡牘から みた三国呉の地方行政制度
３．学会等名 慶北大学校人文学術院HK+事業団 第1回国際学術大会 古代東アジア文字資料研究の現在と未来（国際学会）
４．発表年 2020年

1．発表者名
安部聡一郎

2．発表標題
臨湘縣的地理環境與走馬樓呉簡

3．学会等名
第七届中国中古史前沿論壇国際学術研討会（招待講演）（国際学会）

4．発表年
2019年

1．発表者名
安部聡一郎

2．発表標題
王彬《王杖詔令與東漢時期的武威地域社會――從旱灘坡出土王杖斷簡説起》評議意見

3．学会等名
第七届中国中古史前沿論壇国際学術研討会（国際学会）

4．発表年
2019年

1．発表者名
安部聡一郎

2．発表標題
東漢光武帝祥瑞紀録小考

3．学会等名
全球史視野下的嶺南研究国際学術研討会暨第六届中国中古史前沿論壇（国際学会）

4．発表年
2018年

1．発表者名
安部聡一郎

2．発表標題
評議：呉羽《六朝唐宋黄1u斎儀撰吉的整合与変遷――从元代通書中的記載展開》

3．学会等名
全球史視野下的嶺南研究国際学術研討会暨第六届中国中古史前沿論壇（国際学会）

4．発表年
2018年

〔図書〕　計1件

1．著者名	4．発行年
伊藤敏雄・関尾史郎(編)	2020年
2．出版社	5．総ページ数
汲古書院	312
3．書名	
後漢・魏晋簡牘の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関